

令和2年11月21日

## 邪馬台国九州説の展望

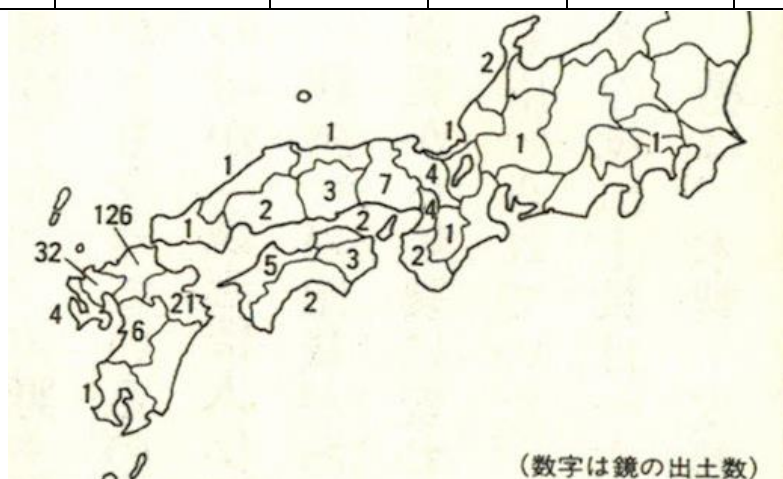
河村哲夫

【テーマⅠ-①】卑弥呼の鏡——金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡を中心として

### 1、『魏志倭人伝』

- (1) 景初 3 年(239)魏の皇帝から「銅鏡百枚」等を下賜する詔書
- (2) 正始元年(240)帶方郡より卑弥呼に届けられる。
- (3) 九州北部から出土する後漢式鏡  
内行花文鏡、方格規矩鏡、獸首鏡、夔鳳鏡、盤龍鏡、鳥文鏡、双頭龍鳳文鏡、位至三公鏡など
- (4) 青銅鏡の分布(奥野正男『邪馬台国はここだ』(梓書院)より)

|     |     | 中国鏡       |           | 国産鏡 |          | 計         |
|-----|-----|-----------|-----------|-----|----------|-----------|
|     |     | 前漢鏡       | 後漢鏡       | 大型  | 小型       |           |
| 九州  | 福岡  | 103       | 126       | 5   | 38       | 272       |
|     | 佐賀  | 10        | 32        |     | 20       | 62        |
|     | 大分  | 2         | 21        |     | 4        | 27        |
|     | 熊本  |           | 6         |     | 11       | 17        |
|     | 長崎  | 3         | 4         |     | 21       | 28        |
|     | 鹿児島 |           | 1         |     | 3        | 4         |
|     | 計   | 118(97.5) | 190(82.6) | 5   | 97(66.4) | 410(81.5) |
| 本州  |     | 3         | 40        | 1   | 49       | 93        |
| 全国計 |     | 121       | 230       | 6   | 146      | 503       |





## 2、大分県日田市出土の「金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡」【令和元年9月6日朝日新聞】

# 古代中国の鏡？ なぜ大分に

「華麗さでは随一」と多くの考古学者が太鼓判をおす古の鏡がある。「金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡」。大分県日田市で戦前に見つかったものとされ、装飾の巧みさから1964年に重要文化財に指定された。由来を含め多くの謎が残るこの鏡が、三国志の英雄・曹操の墓から出土した鏡とほぼ同じ型式である可能性が高まっている。「皇帝の所有物にふさわしい最高級の鏡」がなぜ九州に――。研究者らは首をかしげる。

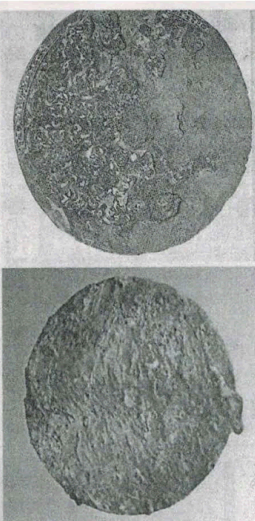
金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡が学界に紹介されたのは63年。青銅器研究に大きな足跡を残した考古学者・梅原末治（1893～1983）が美術研究誌「国華」で取り上げた。

国華によると、直径21・3センチ、厚み2・5ミリ。表面には金で龍文が、銀で爪などが象嵌され、所々に赤や緑の貴石をはめ込む。中央に子孫の繁栄を祈る「長宜子孫」の4字（子は欠落）が金象嵌で刻まれている。古美術商から購入し、表面を覆うさびを削ったところ、これらの装飾が確認されたと報告。「中国本土で

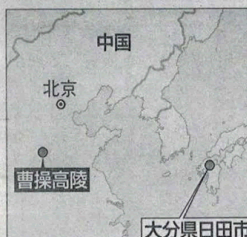
も（略）稀なこの鏡」と評した。

日田での出土品だと古美術商から聞いた梅原は、出土地とおぼしき場所を調査。出土時に立ち会った人の話も聞き、33年の鉄道工事の際に出土したものと推定した。

梅原は出土地の地名から、この遺跡を「ダンワラ古墳」と名づけたものの、埋葬施設の詳細は不明。さらに、一緒に出土したとされる馬具は6世紀以降のごく一般的なもの、超一般の鉄鏡の持ち主にはそぐわない



④「金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡」＝「国華」から  
⑤曹操高陵出土の鉄鏡。全面さびに覆われている＝潘偉斌研究員の発表から



## 「曹操の墓から出土の鉄鏡と酷似」指摘も

### 半世紀経て新知見

い。「本当にダンワラ古墳と呼ばれる場所から出土した鏡か」と疑問を呈する研究者も少なくなかった。

それから半世紀余。新たな知見が明らかになったのは先月初めだ。東京国立博物館で開催中の「三国志」展（16日まで）に関連して開かれた学術交流団座談会のことだった。

「X線で調べたところ、象嵌の龍と思われる文様が見つかった」。2008年に曹操の墓と確認された「曹操高陵」から出土した鉄鏡について、河南省文物考古研究院の潘偉斌研究員が発言。「画像でみる限り、文様も装飾も日本の大分県日田市から出土したという鏡に酷似している。直径も21センチでほぼ同じ大きさだ」と興奮気味に語った。

座談会に参加した東京国立博物館の市元聖主任研究員は「ダンワラ古墳出土とされる鏡は後漢・魏のものと考えられており、曹操高陵出土の鏡は重要な比較資料になる」と話す。曹操（155～220）が礎を築

いた魏。その鏡といえは、中国の史書「魏志倭人伝」に有名な記述がある。邪馬台国の女王・卑弥呼が魏の皇帝から「銅鏡百枚」を贈られた、というのだ。

大阪府立狭山池博物館の西川寿勝学芸員によると、中国では後漢末に銅銭が乱造されて銅の価値が下がり、鉄鏡の方が貴重品となった。曹操自身も金象嵌の鏡を後漢皇帝に贈ったとの記録もあり、「魏でも最高の鏡はダンワラ古墳出土とされる鏡

のような鉄鏡だった可能性が高い」。そんな鏡が北部九州の日田から出土するには、どのような経緯が考えられるのか。

地元を中心に期待を込めて語られるのが、卑弥呼が銅鏡とは別に特に関与したとする説。卑弥呼の没後、その地が周辺に伝えられ、直後数百年後に埋められたとみる。邪馬台国九州説の論者には重要な材料で、日田説を唱える人も。鏡の復元品は天領日田資料館の展示の目玉だ。

### 不明点多いまま

だが多くの考古学者はやや距離を置く。九州大学の辻田淳一郎准教授は「出土状況や遺跡の時期が不明確なため、位置づけが難しい」と話す。「中国でも最高級の鏡が日田地域で出土したことの説明が困難で、もしダンワラで出土したとするなら、近畿などの別の土地に当初持ち込まれたものが、日田地域に搬入された可能性が考えられる」とみる。佐賀女子短期大学の高島忠平名誉教授は「ダンワラ古墳の出土品では

ないのでは」と指摘する。梅原の下で鏡を研磨した白木原和美・熊本大学名誉教授が今年、ある研究者の追悼文集に寄せた文章などが根拠だ。ダンワラの鏡について、立ち会った人は石灰と一箱に須恵器に入れたと話したという。須恵器に入る程度の小さい鏡であることなどから、21センチもある金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡とは別の鏡だった可能性を示唆したという。

高島名誉教授は「出土地について古美術商が言うことは必ずしもあてにならない。あの鏡を邪馬台国九州説の証しと考えるのは厳しい」。

狭山池博物館の西川学芸員は「出土地をめぐる謎は逆に深まった感があるものの、鉄鏡は日本列島の5世紀以降の古墳から5面前後出土しており、潘研究員の指摘がこれらを再検討するきっかけになるのでは」と話す。（編集委員・宮代栄一）

## (1)「金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡」発見の経緯

### ①梅原末治氏による偶然の発見

梅原末治氏(1893～1983 京都大学教授)は偶然にこの鉄鏡を奈良県古美術店より入手し、熊本大学教授の白木原和美氏の協力を得て鉄サビなどを取り除き研磨したところ、背面の金銀錯文が鏡面の一部に残っていることが確認された。

梅原氏はこの鉄鏡の出土経緯を知るため、1963年(昭和38)九州大学の岡崎敬氏を同行されて、発見者の日田市の渡辺音吉氏に経緯を調査された。この結果、この鉄鏡は1933年(昭和8)国鉄久大本線施設工事にあたり、採土の行われた三芳駅東方



約 450 メートルのダンワラ台地裾に存在した竪穴式石郭を主体としたダンワラ古墳(日田市日高町・東寺 1933 年消滅)から出土したとされた。



**夔鳳鏡** きほうきょう 中国鏡の 1 つ。内区と外区に段差をつくらず、同一平面で構成し、四葉座で 4 分割した各区に対向する夔鳳形文を配した鏡。中形で、縁は連弧文になるものと平素縁になるものがある。後漢代から六朝にかけて製作されたが、日本では弥生時代の遺跡や前期古墳より少数例ながら出土しており、すべて舶載鏡である。類似した構図をとるものに獸首鏡がある。また単夔鏡と呼ばれるものも、夔鳳鏡の一種である。

## ②鏡の特徴

鑄鉄製で、直径 21.3 センチ、厚さ 2.5 ミリの薄い扁平なつくりである。

文様は金銀錯の竜文が基調で、各所に玉を嵌装し、破損により全体の 3 分の 1 を遺すにすぎないが、旧状はよくうかがえる。四葉座の鈕を中心に葉間に「長宜●孫」の四文字を篆書体で表している。

## ③中国から出土した鉄鏡

### ・全洪氏の「試論東漢魏晉南北朝時期的鉄鏡」(『考古』1994)

「後漢魏晉南北朝時代の鉄鏡の出土地域は、河南・河北・北京・陝西・遼寧・甘肅・山東・江蘇・湖南・湖北・四川・江西・広東・浙江の県・市の 90 におよぶ墓と数遺跡から 140 枚ほど発見された。

時代別には後漢時代の墓から 60 枚以上発見され、その内訳は北方地域が 40 枚以上、南方地域が 10 枚あまりで、黄河と長江流域に集中していた。魏晉時代の墓からは 30 枚ほど発見され、その内訳は北方地域が 20 枚以上、南方地域からは 10 枚ほどであった。その北方地域は洛陽を中心とし、南方地域は寧鎮(南京・鎮江一帯)および太湖付近を中心としていた」

### ○中国で出土した鉄鏡

| 時代   | 地域   | 出土枚数 | 備考                 |
|------|------|------|--------------------|
| 後漢時代 | 黄河流域 | 40   | 洛陽を中心              |
|      | 長江流域 | 10   | 寧鎮(南京・鎮江一帯)および太湖付近 |
|      | その他  | 10   |                    |
|      | 計    | 60   |                    |
| 魏晉時代 | 黄河流域 | 20   | 洛陽を中心              |
|      | 長江流域 | 10   | 寧鎮(南京・鎮江一帯)および太湖付近 |
|      | 計    | 30   |                    |

○9 寸の鉄鏡——日中の姉妹鏡

|    |                               |           |                     |                       |
|----|-------------------------------|-----------|---------------------|-----------------------|
| 日本 | 日田出土金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡                 | 直径 21.3cm | 夔鳳(きほう)鏡<br>「長宜●孫」銘 |                       |
|    | 岐阜一之宮神社蔵鉄鏡<br>(岐阜県吉城郡国府町・高山市) | 直径 21.2cm | 夔鳳鏡<br>「長宜■孫」銘      | 飛驒の地                  |
| 中国 | 甘肅省武威雷台漢墓出土金銀錯鉄鏡              | 直径 21 cm  | 夔鳳鏡<br>「長宜子孫」銘      | 後漢の靈帝・獻帝<br>(186~219) |
|    | 曹操墓金錯鏡                        | 直径 21 cm  | 夔鳳鏡                 | 魏の曹操<br>(155~220)     |

(2)中国文献に出てくる鉄鏡

①『北堂書鈔』(隋の時代の書)

「魏の武帝(曹操)は(1)尺 2 寸の金錯鉄鏡 1 枚を、皇后は 7 寸の銀錯の鉄鏡 4 枚を持っていた」

②『初学記』(唐の時代の書)

「魏の武帝は(1)尺 2 寸の金錯の鉄鏡を持っていた」

③『曹操集約注』(魏の曹操の書いたものに注をつけたもの)

「皇帝は(1)尺 2 寸の金錯鉄鏡 1 枚を、皇后は銀錯 7 寸の鉄鏡 4 枚を、貴人・公主は 9 寸の鉄鏡を持っていた」

④『太平御覧』(宋の時代の書物)

「魏の武帝(曹操)が皇帝(獻帝)に献上した雑物(用物)のなかに(1)尺 2 寸の金錯鏡 1 枚、皇太子の雑物として純銀錯鏡 7 寸の鉄鏡 4 枚、貴人・公主用の 9 寸の鉄鏡 40 枚があった」

| クラス    | 鏡の種類 | 直 径     |         | 備 考              |
|--------|------|---------|---------|------------------|
| 皇帝     | 金錯鉄鏡 | 1 尺 2 寸 | 28.9cm  |                  |
| 貴人・公主  | 銀錯鉄鏡 | 9 寸     | 21.7 cm | 日田の金銀錯鉄鏡 21.3 cm |
| 皇后・皇太子 | 鉄鏡   | 7 寸     | 16.8 cm |                  |

・魏晉時代の 1 尺 = 10 寸 = 24.1cm

・貴人・・妃、公主・・皇帝の娘

日田の鏡は、大きさは貴人・公主並みの 9 寸であるが、金銀玉石による豪華な象嵌は比類のない一品である。

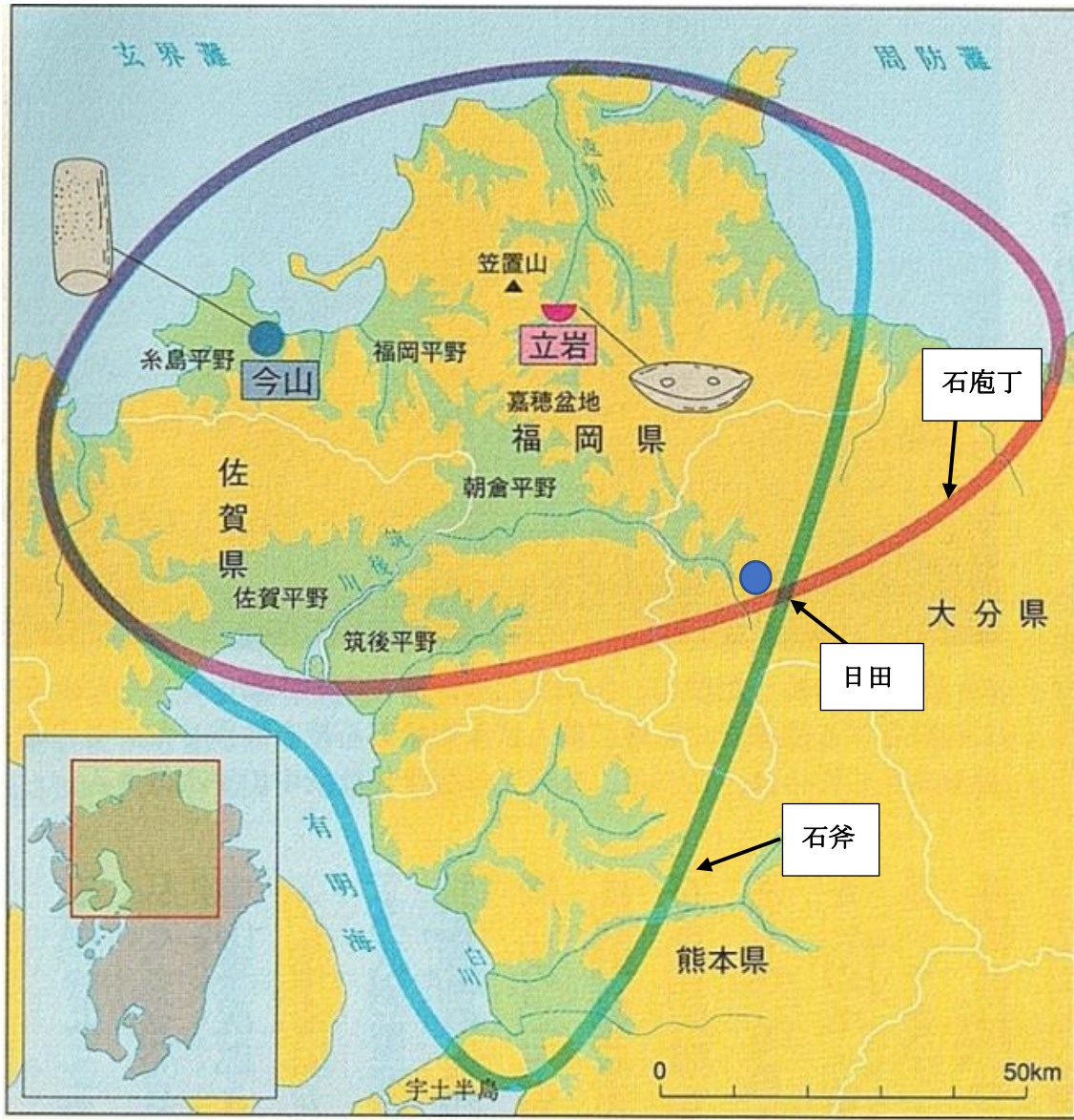
⑤日田出土の金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡は「邪馬台国筑紫平野説」を補強する

「魏志倭人伝」は 239 年、中国皇帝が卑弥呼に「銅鏡百枚」を贈ったと記しているが、そのなかの 1 枚、あるいは別ルートで入手した魏の鏡であったとすれば、邪馬台国九州説を補強する極めて重要な遺物ということになる。

しかしながら、邪馬台国近畿説の立場からみれば、卑弥呼とは無関係の鏡であり、出土状況やその後の経緯などからしても、その価値を認めることはできないとして、この鏡を論じること自体に激しい拒絶反応・アレルギー反応を示す傾向が強い。

### 3、日田と筑紫平野

(1)立岩(飯塚市)の石庖丁と今山(福岡市西区)の石斧の分布(紀元前2世紀ごろ～)

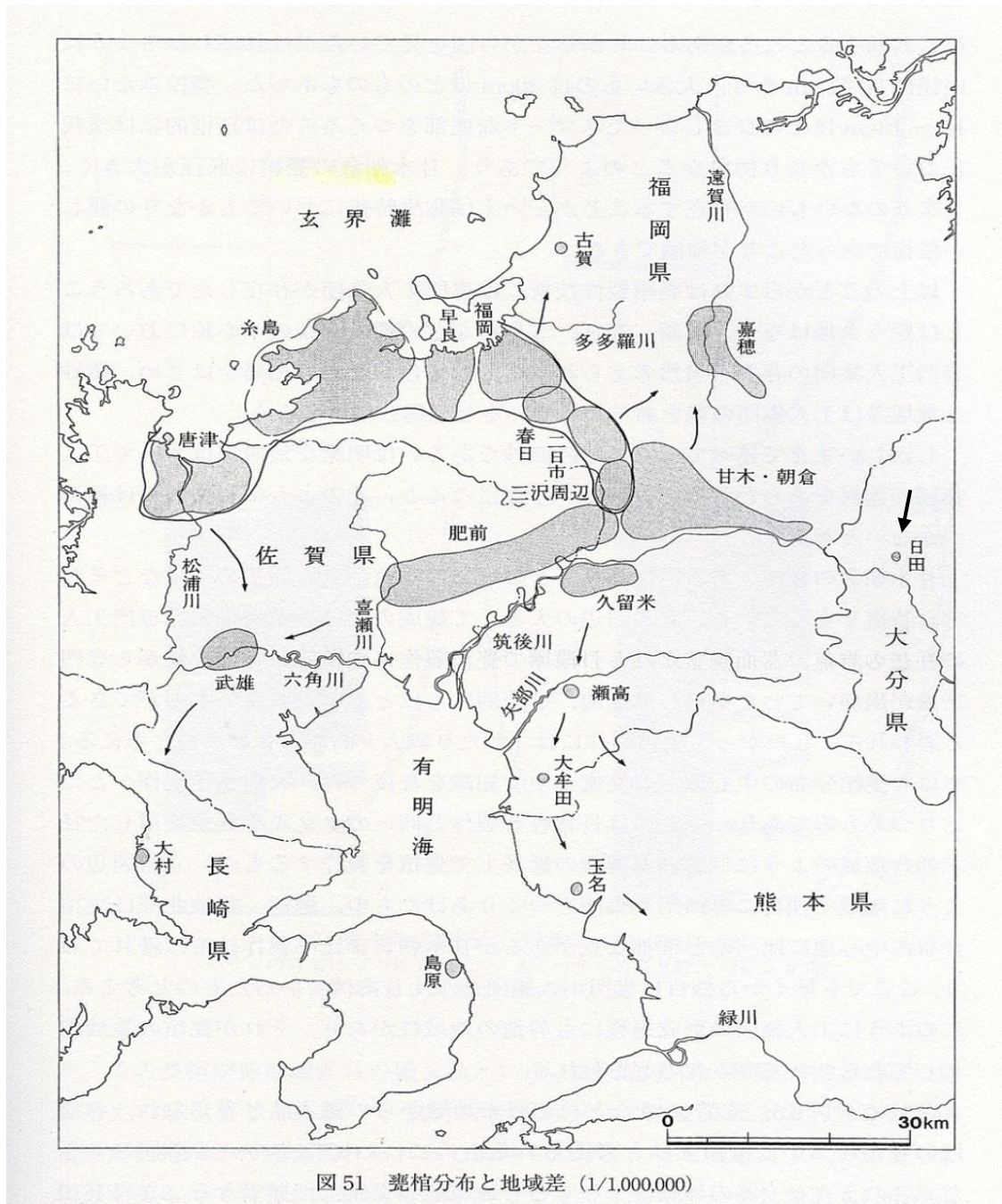


田中 琢著『倭人争乱』(1991 集英社)



(2)カメ棺文化圏の一角としての日田(紀元前2世紀ごろ～)

橋口達也著『甕棺と弥生時代年代論』(2005 雄山閣)より

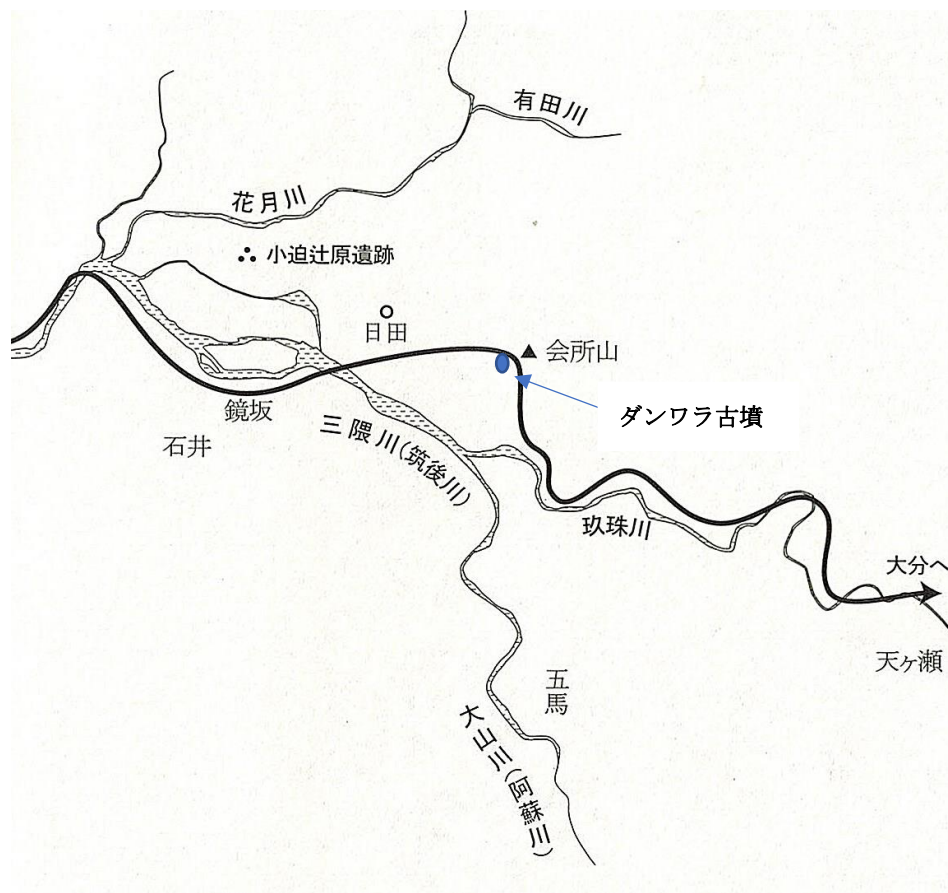


① 日田はカメ棺文化圏に属する

金印奴国の時代の文化圏の特徴であるカメ棺は、筑後川をさかのぼって日田・玖珠地区に及ぶが水分峠は越えない。

② 東九州の文化圏には属さない

東九州地域から出土する下城式土器は日田・玖珠地区には及ばない。



### (3) 日田の久津媛の伝承

#### ①『豊後国風土記』

「むかし、纏向の日代の宮に天の下をお治めなされた大足彦天皇(景行天皇)が球磨贈於を征伐して凱旋なされたとき、筑後の生葉の行宮をお発ちになって、日田郡にお出ましになった。ここに久津媛という名の神があったが、人間になって出迎えて、この国の国状をよく判断して言上した。こういうわけで久津媛の郡という。いま日田郡といっているのは、それがなまったものである」

#### ②日田

『和名抄』では「日高」と書かれ、『先代旧事本紀』では「比多」と書かれる。いずれにしても、「ひた」と読む。

#### ② 久津媛神社(日田市日高)

祭神は久津媛神と大足彦忍代別命(景行天皇)。

会所山は古代の聖地といわれる3つの頂上を持つ山で、東西に細長く見晴らしのよい西の頂上に久津媛神社が鎮座している。その西端中腹の鳥羽塚古墳(円墳)、南頂上の会所山古墳(北向古墳・横穴式石室)と後山古墳(円墳)などの古墳が確認されている。



#### 4、岐阜一之宮神社蔵鉄鏡

##### (1)一之宮神社(高山市国府町名張字宮の前 1240)

①祭神・・下照姫命(したてるひめ・大国主命と田心姫命の娘)

②由緒

創建時期は不詳であるが、古書に祭神下照比賣命下照大権現等と記されている。  
往古より一之宮大菩薩と称し、大宮又は一之宮と称した。



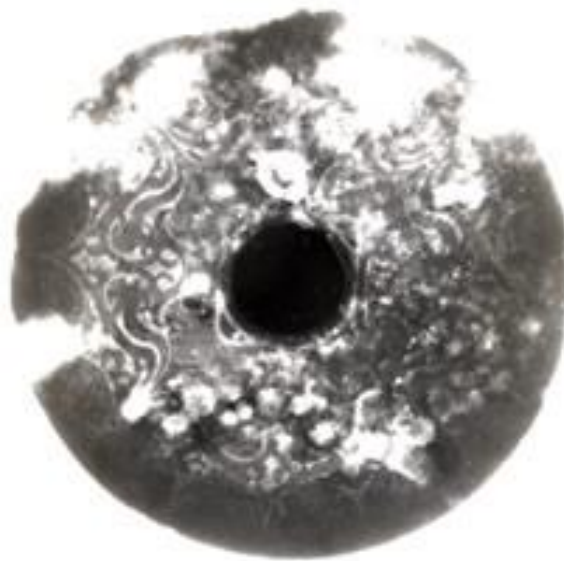
##### (2)一之宮古墳

明治4年(1871)一之宮神社社殿拡張工事に際し、社殿北西の7世紀頃の古墳から鉄鏡1面、鐙(つば)3点、直刀2本、金環6個、銅鈴3個、鉄鏃(てつぞく)29本、鉄製鎌、鉄釘など計50点が出土した。

昭和60年に、三重大学教授八賀晋氏がX線撮影調査をおこなったところ、鉄鏡は直径21.2cmで、中心から四方に伸びた四枚の葉の間に、向かい合った一本足の鳥が2羽ずつ計8羽ほどこされた中国製の「夔鳳鏡(きほうきょう)」と鑑定された。鉄鏡の表面は、表裏とも腐食しているため、鉄の酸化を防ぐ保存処理が施された。岐阜県指定重要文化財(昭和62年1月)



錆に覆われた鉄鏡



エックス線画像



### (3)飛驒を治めたのは尾張一族

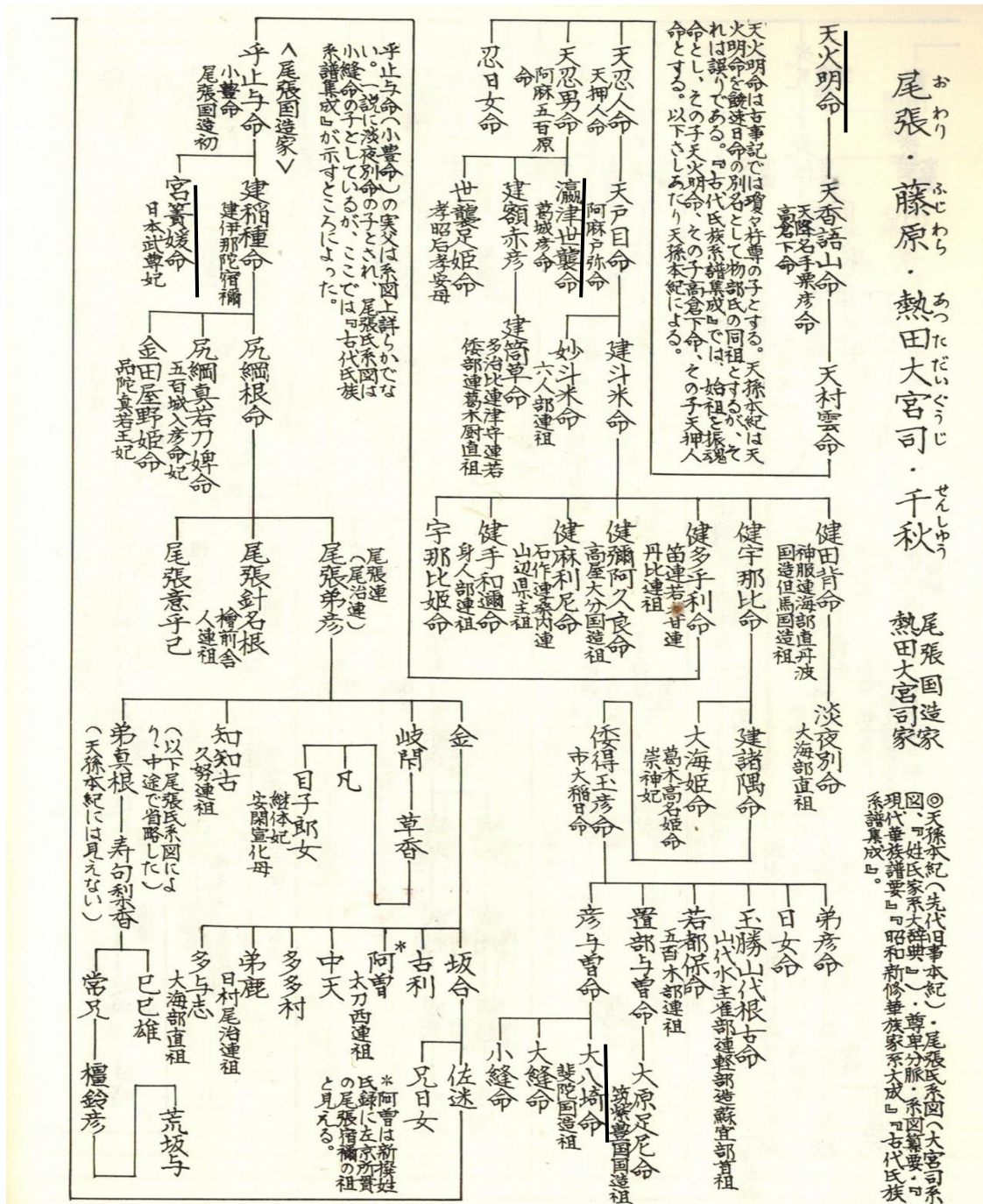
#### ①『先代旧事本紀』

「斐陀国造：志賀高穴穗の朝(成務天皇)の御世に、尾張連の祖の瀛津世襲命(おきつよそのみこと)の児(こ)の大八椅命(おおはしのみこと)を国造に定め賜う」

#### ②尾張氏

神武天皇に先立って九州から近畿に東遷した天火明命(ニギハヤヒ)の末裔氏族

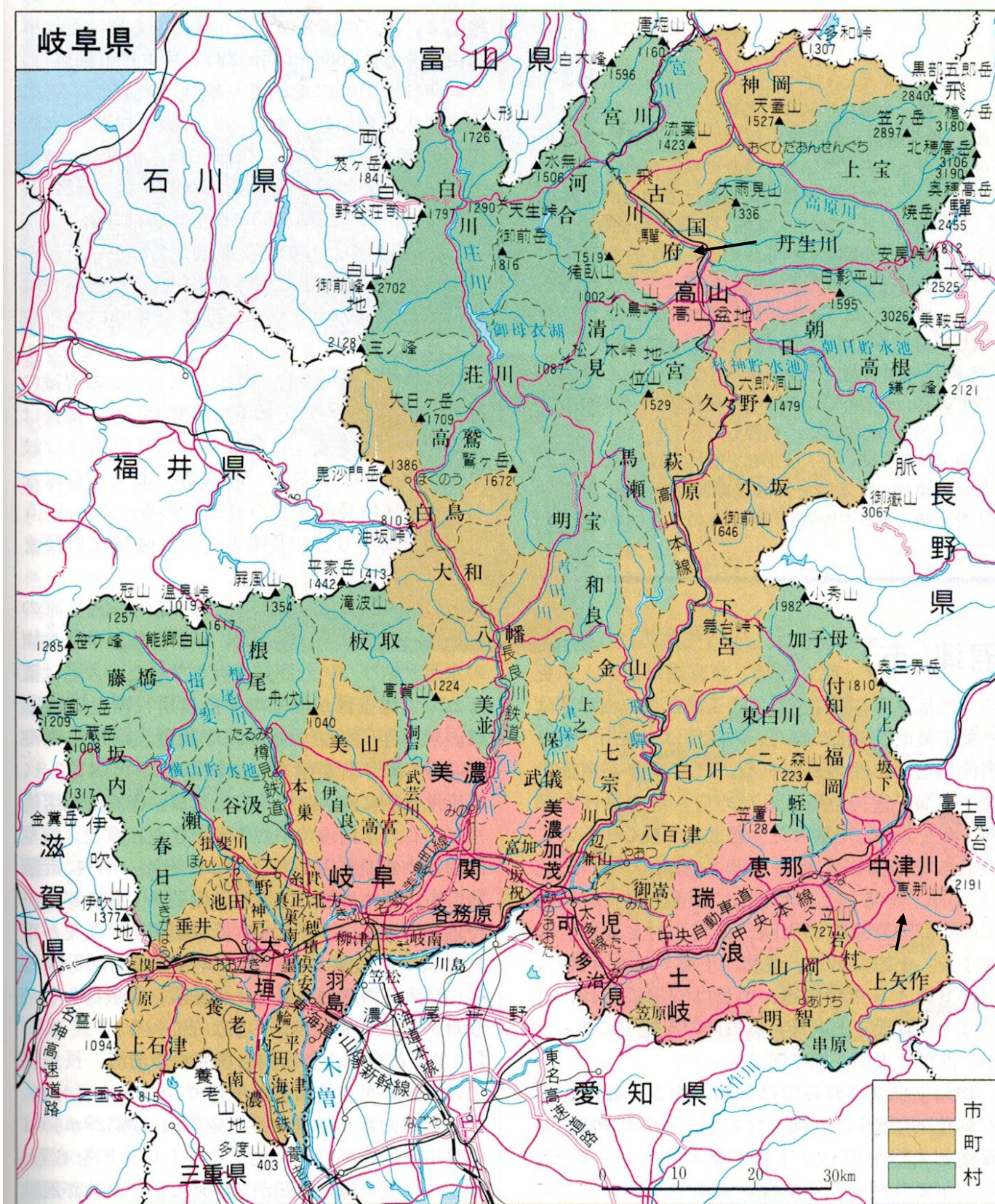
③よって、飛驒の鉄鏡は九州から伝来した可能性が高い。



#### (4)飛騨の国









### ①飛驒(本字)、斐太、斐陀

東山道の要衝の地——飛驒支道

### ②国府町

飛驒国の「国衙」があったことに由来する。

国府からは、縄文時代、弥生時代、古墳時代の遺跡が多数出土し、岐阜県最大の前方後円墳や古墳群がある。飛驒地方で 500 余の古墳が発見されているが、そのうち 390 基が国府町内にある。

## 5、「日田」あるいは「飛驒」の意味するところ

### (1)日(太陽)が昇る方向

それを見る人々は西方にいる。

### (2)東へ向かう前進基地

その勢力の中心は西方にある。

|         | 別称                                   | 説 明                                                                                                             |
|---------|--------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 日田(大分県) | 日高(和名抄)<br>比多(先代旧事本紀)<br>久津媛(豊後国風土記) | ・筑前・筑後、豊前・豊後、肥後国が接する要衝の地<br>・上座郡(恵蘇八幡)から約 20 km<br>・平塚川添遺跡から約 30 km                                             |
| 飛驒(岐阜県) | 飛驒(本字)<br>斐太<br>斐陀                   | ・東山道——飛驒支道の要衝の地<br>・鉄鏡が出土した国府町は飛驒地域の国衙があったことに由来する。<br>・国府からは、縄文時代、弥生時代、古墳時代の遺跡が多数出土し、岐阜県最大の前方後円墳や古墳群約 390 基がある。 |
| 常陸(茨城県) | 日高見(常陸国風土記)                          | ・古代東海道の終着点<br>・ヤマトタケルの蝦夷討伐の前進基地                                                                                 |
| 日田の意味   | 邪馬台国時代                               | 日田(大分県)【 <u>邪馬台国朝倉説を補強する。</u> 】<br>『 <u>釈日本紀</u> 』・神武東征以前は大和とする。九州から見て東方                                        |
|         | 神武東遷以降                               | 飛驒(岐阜県)・常陸(茨城県)。本州の東方                                                                                           |
|         | ヤマトタケルの時代                            | 日高見国＝北上川(岩手・宮城県)まで前進                                                                                            |
|         | 結論:王権の支配する地の東方——日の出の方向にある国           |                                                                                                                 |



## 【テーマⅠ-② 天照大神の鏡】——八咫鏡を中心として

### 1、天の岩戸

三種の神器の一つの八咫鏡は、天照大神の岩戸隠れの際にはじめて登場する。

出雲に追放されることになったスサノオは、別れを告げるために姉の天照大神のもとを訪れたが、神聖な衣を織るための機屋（はたや）に皮を剥いだ天斑駒を投げ込むなど乱暴狼藉を働いた。

天照大神は怒って、天の岩屋を閉じて籠ったので国中が常に暗闇となり昼夜の区別もつかなくなった。八十万神は天の安河の河原に集まり、天の岩戸の前で祭祀を行うことになった。



## 2、「三種の神器」

八咫鏡は、このときイシコリトベ(石凝戸辺)によってつくられた。「トベ」は女性をしめす。

『古語拾遺』には、「天糠戸(あめのぬかど)の子、作鏡連(かがみづくりのむらじ)らの遠祖(とおつおや)」とされ、『日本書紀』神代上第三の一書に「鏡作の遠祖の天抜戸」と記されている。第二の一書では、天糠戸が八咫鏡をつくったとされている。天糠戸・イシコリトベ(石凝戸辺)親子は鏡作りの専門集団を率いていたのであろう。

八咫鏡とともに櫛の木に掛けられた八尺瓊勾玉(やさかにのまがたま)は、玉祖連(むらじ)の祖の玉祖命がつくった。『古語拾遺』によると、櫛明玉神(くしあかるたま)とされている。

八咫鏡と八尺瓊勾玉は、櫛に取り付けられ、忌部氏の祖の太玉命がそれを掲げて天の岩戸の祭祀に臨んだ。太玉命はタカミスビ(高皇産靈尊)の子とされ、鏡や玉などのモノづくり集団を率いていたのであろう。

やがて、八咫鏡・八尺瓊勾玉・草薙剣は天照大神の孫のニニギノミコトに継承され、その後神武天皇とともに近畿に移動し、天皇家の三種の神器となった。——これが日本の古代文献が一致して伝える伝承である。

## 3、試作された二面の八咫鏡

実は、『古語拾遺』には、八咫鏡の試作品がつくられたことが記されている。

「イシコリトベをして日の像(みかた)の鏡を鑄さむ。はじめに鑄たるはいささか意に合はず。これ紀伊国の日前神(ひのくまのかみ)なり。次に鑄たるはその形、美麗し。これ伊勢大神なり」

これによると、日前神と名づけられた鏡が一面试作されている。

ところが、「日前神宮(ひのくまじんぐう)」と「國懸神宮(くにかかすじんぐう)」（和歌山市秋月）の社伝によると、ご神体として「日像鏡(ひがたのかがみ)」と「日矛鏡(ひぼこのかがみ)」という二面の鏡が伝えられている。

神武東征の後の神武天皇2年、紀国造家(紀氏)の祖の天道根命(あめのみちねのみこと)が、二面の鏡を賜り、日像鏡を日前宮に、日矛鏡を國懸宮にそれぞれ奉納したという。

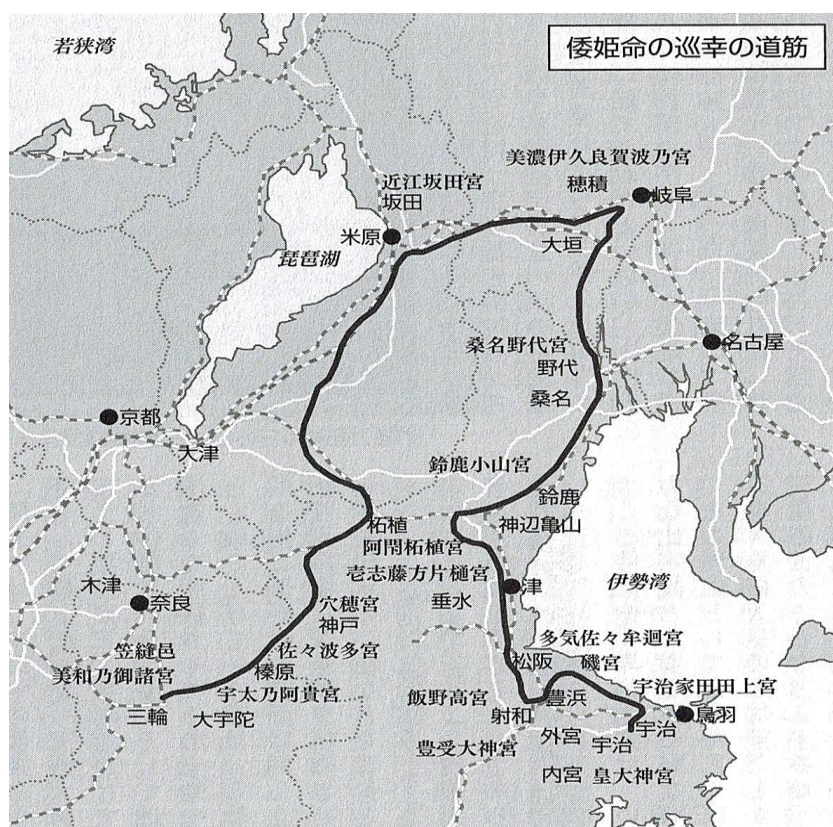
なお、これまで実物が公開されたことがなく、調査されたこともないため、社伝どおりであるかどうかは確認されていない。

## 4、八咫鏡が伊勢神宮へ移される

国内情勢の不安の原因が天照大神と倭大国魂神の二神を朝廷の居所に祭っていることにあったと考えた第10代崇神天皇は、豊鍬入姫命に命じて天照大神——すなわち八咫鏡を宮中から笠縫邑(かさぬいのむら)に移して祭らせた。



倭大国魂神については淳名城入姫命に命じて祭らせたが、髪が落ち、体は痩せて祭祀を続けることができなくなったので、倭迹迹日百襲姫命の夢のお告げにより、大倭直の祖の長尾市宿禰を祭主として祭らせた。これが、大和(おおやまと)神社(奈良県天理市新泉町星山)である。



## 5、形代(レプリカ)の製作と三種の神器の変遷

とある。

なお、草薙劔については、倭姫命からヤマトタケルにわたされ、尾張の宮簀媛(みやすひめ)を経て、現在熱田神宮(名古屋市熱田区神宮)のご神体とされている。

伊勢神宮の八咫鏡は、何度か本殿の火災等に遭遇することもあったが、現在でも伊勢神宮のご神体として守られている。

熱田神宮の草薙剣は、新羅の僧道行に盗難されるという事件もあったが、無事に取り戻され、宮中から再び熱田神宮に移され、現在でも熱田神宮のご神体として守られている。

もちろん、宮中の八咫鏡、伊勢神宮の八咫鏡、熱田神宮の草薙剣も、公開されたことはなく、調査も行われていないため、現物がどのようなものか誰も知る人はいない。

三種の神器の変遷をまとめると次のようになる。

| 八咫鏡                                                                                 |                                                                                     | 草薙の剣                         |                                                                                       | 八咫瓊勾玉                                                                                 |
|-------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| イシコリトベ(石凝姥命)が作製                                                                     |                                                                                     | ヤマタノオロチの尾から                  |                                                                                       | 玉祖命が作製                                                                                |
| 実物                                                                                  | 形代<br>(レプリカ)                                                                        | 実物                           | 形代<br>(レプリカ)                                                                          | 実物                                                                                    |
| 天照大神<br>(天の岩戸)                                                                      |                                                                                     | 八岐大蛇の尾から<br>出た剣をスサノオが<br>得る。 |                                                                                       |   |
|                                                                                     |                                                                                     | 天照大神に献上                      |                                                                                       |                                                                                       |
| ニニギハミコトに授与                                                                          |                                                                                     | ニニギハミコトに授与                   |                                                                                       |                                                                                       |
| 神武天皇が継承                                                                             |                                                                                     | 神武天皇が継承                      |                                                                                       |                                                                                       |
| 大和の笠縫邑<br>(豊鍬入姫命)                                                                   | 忌部氏が作成<br>(宮中)                                                                      | 大和の笠縫邑<br>(豊鍬入姫命)            | 忌部氏が作成<br>(宮中)                                                                        |  |
| 伊勢(倭姫命)                                                                             |                                                                                     | 伊勢(倭姫命)                      |                                                                                       |                                                                                       |
|  |  | ヤマトタケル                       |  |   |
|                                                                                     |                                                                                     | 宮簀媛                          |                                                                                       |                                                                                       |
|                                                                                     |                                                                                     | 熱田神宮                         |                                                                                       |                                                                                       |
|                                                                                     |                                                                                     | 僧・道行が盗む                      |                                                                                       |                                                                                       |
|                                                                                     |                                                                                     | 宮中へ戻る                        |                                                                                       |                                                                                       |
|                                                                                     |                                                                                     | 熱田神宮                         |                                                                                       |                                                                                       |
|                                                                                     | 壇ノ浦                                                                                 |                              | 壇ノ浦                                                                                   | 壇ノ浦                                                                                   |
| 伊勢神宮                                                                                | 皇居<br>「賢所」                                                                          | 熱田神宮                         | 皇居<br>「剣璽の間」                                                                          | 皇居<br>「剣璽の間」                                                                          |



なお、『皇太神宮儀式帳』(804 年)によると、伊勢神宮の八咫鏡は、内径 1 尺 6 寸 3 分(49.4 センチ)の鏡箱の中に収納されていたという。『延喜式』にも、鏡箱の内径は、1 尺 6 寸 3 分(49.4 センチ)とある。

ということは、八咫鏡の直径は、1 尺 6 寸 3 分(49.4 センチ)よりもやや小さい鏡の可能性が高い。

## 6、平原遺跡(福岡県糸島市)から出土した大型鏡

福岡県糸島市といえば、邪馬台国時代に伊都国があった地域である。末盧国(唐津市)、奴国(福岡市・春日市など)とともに、稲作を中心とした弥生文化の先進的な地域である。邪馬台国の海の玄関口とされ、一大率を配置し、諸国を監察した。「世々王あり」と、卑弥呼の時代になっても伊都国王が継承されていた。

その伊都国の中心部の瑞梅寺川と雷川にはさまれた曾根丘陵から、昭和 40 年、ミカン園の造成中に多数のガラス片や多くの遺物とともに、直径 46.5 センチの巨大な内行花文鏡が破碎された姿で発見され、原田大六氏を主任調査員として福岡県教育委員会による調査がおこなわれた。

1 号墓は、東西約 14 メートル、南北約 10.5 メートルの長方形の方形周溝墓で、出土した遺物などから弥生時代後期中頃と推定されており、邪馬台国時代と重なる時代の遺跡である。

墓の周囲には幅 1.5 メートルから 3.3 メートル、深さ 30 センチから 10 センチ程の周溝があり、中心部には、長さ 3 メートル、幅 90 センチの割竹形木棺(丸太を半分に割り、中をくり抜いて再び合わせ棺とした物)が埋納されていた。

鏡類だけでいえば、大型鏡 5 面 + 35 面 = 40 面が出土しており、1 つの墳墓から出土した銅鏡の枚数としては日本最多である。

原田大六氏は「大型内行花文鏡の「文様」と「大きさ」から「八咫鏡」と解し、伊勢神宮の八咫鏡も同型の鏡なのではないかと推測した。

勾玉や管玉などの装飾品が多く、武器類が少ないため、埋葬された人物は「女性」と考えられている。伊都国王の墓とみる説が多いが、原田大六氏は天照大神の墓と断じた。

奥野正男氏は卑弥呼の墓とし、最近では安本美典氏もこれに同調されている。

なお、平原遺跡から出土した大型の内行花文鏡(内行花文八葉鏡)5 面は、すべて仿製鏡(日本製)とみられている。直径 46.5 センチという巨大な鏡である。一面の重さは約 8 kg。

直径 46.5 センチといえば、前述した『皇太神宮儀式帳』と『延喜式』に記された、鏡箱の内径は、1 尺 6 寸 3 分(49.4 センチ)にちょうど収まる大きさである。



12 号鏡 直径 46.5 cm、内行花文八葉鏡

## 7、八咫鏡とは

### (1)「咫(あた)」

「咫(あた)」は、古代中国の長さの単位である。『説文解字』には、「中婦人手長八寸、謂之咫。周尺也」とある。「周代の尺で女性の手の長さ 8 寸を咫という。」という意味である。

すなわち、8 寸 = 0.8 尺 = 1 咫(あた)となり、1 尺 = 1.25 咫(あた)となる。

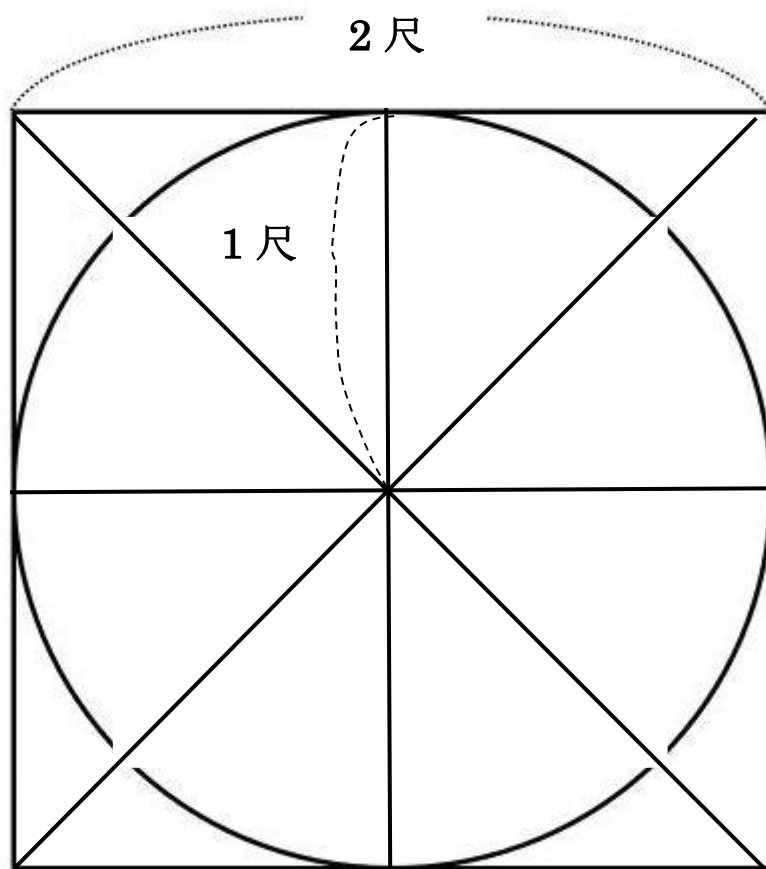
男性の手を広げたときの親指と中指の間の長さが 1 尺の起こりで、女性の指は男性よりも短いことから、0.8 尺とされたとみられる。ちなみに、漢代の 1 寸は約 2.3 センチで、1 尺は約 23 センチとなる。平原遺跡の大型鏡の直径は 46.5 センチであるから、半径は約 23 センチ = 1 尺ということになる。古代中国において、円周率が 3.14・・・ということはまだ知られていなかったはずである。

### (2)古代中国の円周率 $\pi = 3.2$

|       | 半径  | 直径  | 円周率   | 円周    | × 1.25 |
|-------|-----|-----|-------|-------|--------|
| 平原大型鏡 | 1 尺 | 2 尺 | (3.2) | 6.4 尺 | 8 咫    |

$\pi = 3.2$  で計算すると、平原遺跡の大型鏡の円周はちょうど 8 咫となる。半径 1 尺、直径 2 尺、円周率 3.2 で計算すると、円周は 6.4 尺、咫に換算すると 8 咫となるわけである。不正確ではあるが、咫の導入によって、簡単に円周が計算できる。ということは円の面積も簡単に計算できるということである。





| 正方形(A) |         |                  | 円(B) |             |                    | A/B  | B/A |
|--------|---------|------------------|------|-------------|--------------------|------|-----|
| 全周     | 2 尺×4   | 8 尺              | 円周   | 2 尺×3.2     | 6.4 尺              | 1.25 | 0.8 |
| 面積     | 2 尺×2 尺 | 4 尺 <sup>2</sup> | 面積   | 1 尺×1 尺×3.2 | 3.2 尺 <sup>2</sup> | 1.25 | 0.8 |

## (2)正方形と円

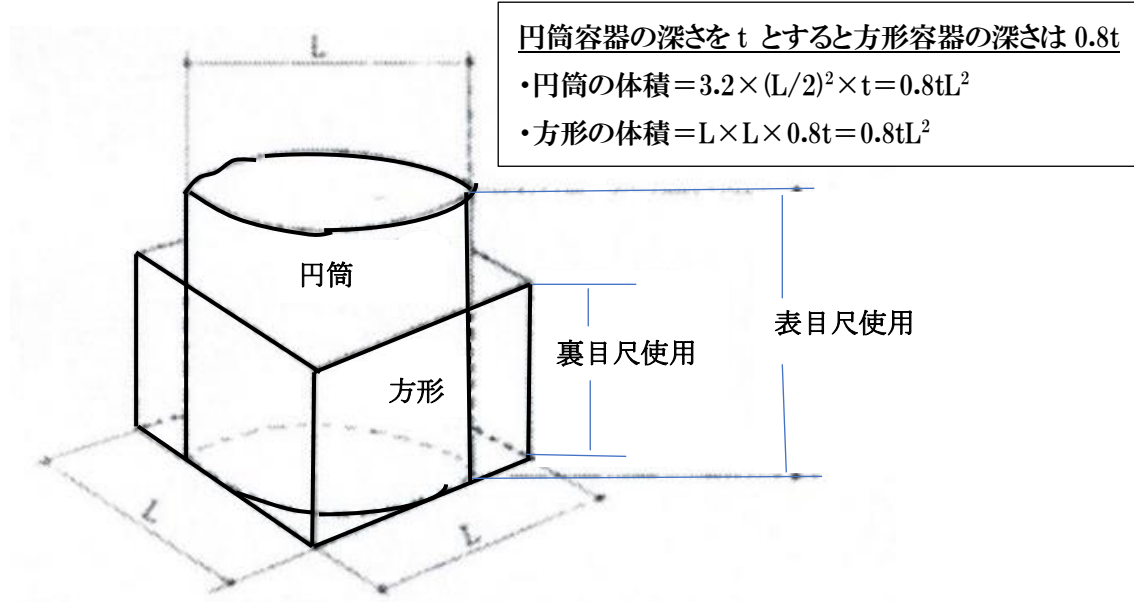
これは、いったい何を意味するのか。正方形の全周あるいは面積がわかれば、円の円周と面積が自動的にわかるということである(正方形×0.8=円)。その逆もまたしかり(円×1.25=正方形)。

古代人にとって、1.25 と 0.8 は神の定数である。

たとえば、通常の 1 尺を基準にした物差(表目尺)と、その目盛を 1.25 倍引き延ばした物差(裏目尺)を作成したとしよう。

- ① 円に外接する正方形の周囲を裏目尺で測れば、表目尺で測った内接円の円周となる。 $\rightarrow 0.8L \times 4 = 3.2L = L \times 3.2$
- ② 円に外接する正方形の一辺を表目尺で測り、もう一辺を裏目尺で測ってかけ合わせれば、内接円の面積となる。これは、円の直径を表目尺と裏目尺で測ってかけ

- 合わせれば、円の面積となるということでもある。 $\rightarrow L \times 0.8L = 0.8L^2 = 3.2 \times (L/2)^2$
- ③ 表目尺で正方形の面積を出し、その数値を表目尺上に取り、その長さを裏目尺で読めば、表目尺で測った内接円の面積となる。 $\rightarrow L \times L \Rightarrow 0.8L^2 = 3.2 \times (L/2)^2$
- ④ 同じ容量の円筒容器と方形容器を作るには、円筒容器の深さを表目尺で測り、方形容器の深さを裏目尺で測って同じ寸法値にすればいい。



### (3)「魯班尺(ろはんしゃく)」

1.25 倍の目盛をつけた裏目尺こそが、春秋時代に魯の公輸班によって考案されたと伝わる「魯班尺(ろはんしゃく)」であったかもしれない。周尺より 2 寸長い尺であったという。現在では本来の用途が忘れられ、「風水尺」とも呼ばれて占いの道具になっている。上下 2 段の目盛には吉凶の文字が付され、上段が「門公尺」、下段が「丁蘭尺」と呼ばれ、伝統的に上段の目盛が下段より長い。

### (4)鏡の多目的用途

このように、平原遺跡の大型鏡は、単に人の顔を映し、あるいは王者の権威を高めるための威信財としての用途のほかに、中国単位による長さや、面積・体積などを計算する魯班尺的な用途もあったのではないか。

中心部の八葉の文様は、東西南北の直角方向のほか東北・南東・北西・南西 45 度の方角を示す羅針盤としての用途もあったのではないか。

太陽光を反射する通信手段として用いられた可能性だってあり得る。

現代の数学者・物理学者が考えれば、もっと多くの用途が見つかるかもしれない。

### (5)平原遺跡の大型鏡は八咫鏡

平原遺跡の大型鏡は、特別の用法を備えた特別の鏡として、特別に鑄造された可能性が高い。しかも、日本製である。

天照大神の八咫鏡も、その名のとおり八咫鏡にふさわしい。天の岩戸の祭祀に用い



られ、代々天皇家に伝えられてきた。しかも、内径 1 尺 6 寸 3 分(49.4 センチ)の鏡箱に平原遺跡の大型鏡がちょうど収まる大きさである。すなわち、平原遺跡の大型鏡は八咫鏡とみるべきである。まとめれば、次のとおりとなる。

| 八咫鏡  | 面 数 |
|------|-----|
| 平原遺跡 | 5 面 |
| 宮中   | 1 面 |
| 伊勢神宮 | 1 面 |
| 日前神宮 | 1 面 |
| 國懸神宮 | 1 面 |
| 計    | 9 面 |

平原遺跡は考古学的情報であり、それ以外の古代神話・伝承が伝える情報は、すべて天照大神と関連している。卑弥呼の鏡かどうかはともかくとして、直接・間接に天照大神に関連した鏡であることはまちがいない。天照大神は九州と密接な関連がある。このことを平原遺跡は告げている。

## 8、天照大神は卑弥呼か

【I-①】の「卑弥呼の鏡」においては、卑弥呼の時代の鏡は後漢鏡であり、大分県日田市から出土したとされる「金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡」は魏の皇帝から卑弥呼に特別に贈与された可能性が高いことを論じた。

【I-②】の「天照大神の鏡」においては、八咫鏡が平原遺跡出土の大型鏡と同じである可能性について論じた。

安本美典氏は、約半世紀にわたり「天照大神＝卑弥呼」と主張されている。

もし、天照大神＝卑弥呼であるならば、「卑弥呼の鏡」と「天照大神の鏡」がパラレルな関係として論じることが可能となる。

## 【テーマⅡ】邪馬台国九州説の展望——一つの試案

### 1、九州説にとって超難問の「水行十日・陸行一月」



#### (1)「水行10日」の解釈

|    | 帯方郡⇒狗邪韓国 | 狗邪韓国⇒対馬 | 対馬⇒壱岐 | 壱岐⇒末盧国 | 計       |
|----|----------|---------|-------|--------|---------|
| 日数 | 7日       | 1日      | 1日    | 1日     | 10日     |
| 距離 | 7000里    | 1000里   | 1000里 | 1000里  | 10,000里 |

○帯方郡から邪馬台国まで 12,000 里

12,000 里－10,000 里(帯方郡～末盧国)＝2,000 里

『魏志倭人伝』の1里は約90mであるから、末盧国から2,000里×90m＝180km

の範囲内に邪馬台国があることになる。



(2)「陸行 1 月」の解釈

| 帶方郡⇒狗邪韓国 | 末盧国⇒邪馬台国(筑紫平野) | 計      |
|----------|----------------|--------|
| 7000 里   | 2000 里         | 9000 里 |
| 23 日     | 7 日            | 30 日   |

朝鮮半島内の陸行(7000 里)+九州内の陸行(2000 里)=1 月とみなす。

1 月(30 日)を 7:2 に振り分けると 23 日と 7 日になる。

結論:末盧国から歩いて 7 日程度の距離に邪馬台国がある。

行程:①呼子→②唐津(末盧国)→③糸島(伊都国)→④那珂川(奴国)→

⑤宇美(不弥国)→⑥太宰府あたり→⑦⑧筑紫平野

「水行・陸行」を、帶方郡を起点にして、水行すれば 10 日、帶方郡から陸行すれば 1 月と解釈する。

2、投馬国=投与国=豊の国(豊前・豊後)ではないか。

(1)投馬国まで「水行 20 日」の解釈

①帶方郡→末盧国=水行 10 日(前述のとおり)

②末盧国→投馬国=水行 10 日

計 水行 20 日

結論:末盧国から水行 10 日で投馬国に到達する。

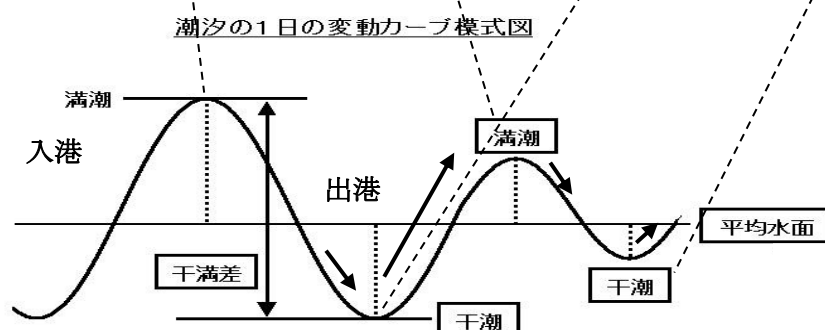
行程:①呼子→②唐津(末盧国)→③糸島(伊都国)→④博多(奴国)→

⑤ 新宮(不弥国)→⑥宗像→⑦芦屋→⑧洞海湾→⑨門司→

⑩ 荻田・行橋(豊前)

○博多港の潮位(令和 2 年 11 月 21 日)

| 年月日        | 満潮       |         | 干潮      |         |
|------------|----------|---------|---------|---------|
| 令和 2.11.21 | ① 01:00× | ② 16:28 | ③ 07:59 | ④ 19:42 |



### ③投馬国と投与国(豊の国)

※古代文献では「馬」と「与」がよく似た形をしている。



結論①:「水行 10 日陸行 1 月」は帯方郡を起点としなければならない。

結論②:投馬国への「水行 20 日」も同じく帯方郡を起点としなければならない。

結論③:投馬国＝投与国＝豊の国(豊前・豊後)の可能性が高い。

3、同様に、卑弥呼の後継者の「台与」は「豊」ではないのか。

卑弥呼の後継者の「壹与(いちよ)」を「臺與(とよ・台与)」とみる説あり

## 【テーマⅢ】邪馬台国九州説からみた狗奴国

### 1、『魏志倭人伝』

その南に狗奴国<sup>①</sup>あり、男子を王となす。その官に狗古智卑狗<sup>②</sup>あり。女王に属せず。

その八年<sup>①</sup>、太守王<sup>おき</sup>顧官に到る。倭の女王卑弥呼、狗奴国の男王卑弥弓呼<sup>②</sup>と素より和せず。倭(の)載斯烏越等<sup>③</sup>を遣わして郡に詣り、相攻撃する状を説く。塞曹掾史張政等<sup>④</sup>を遣わし、因って詔書・黄幢<sup>もたら</sup>を齎し、難升米に拝仮せしめ、檄<sup>つく</sup>を為りてこれを告諭す。

狗奴国・・・女王国の南にある。  
女王国と敵対していた。  
狗古智卑狗・・・菊池彦か。  
卑弥弓呼(ひみここ)・・・彦御子の誤りか。

- (1) 「邪馬台国筑紫平野説」を前提にすれば、その南方に狗奴国は所在したことになる。
- (2) 菊池川流域に邪馬台国時代と重なる「方保田東原(かとうだ・ひがしばる)遺跡」という大遺跡があるが、ほとんど知られていない。
- (3) 邪馬台国九州説にとってきわめて重要な遺跡であり、今後積極的に広報を行う必要がある。



## 2、方保田東原遺跡(山鹿市方保田字東原)



## 3、鉄の利用

### (1)大量の鉄が出土している。

とりわけ戦闘用の「鉄鏃」

### (2)鉄器を作った鍛冶場と思われる住居跡の存在



図 11 弥生時代後期後半におけるおもな鍛冶遺構の分布 (『熊本県の歴史』より)

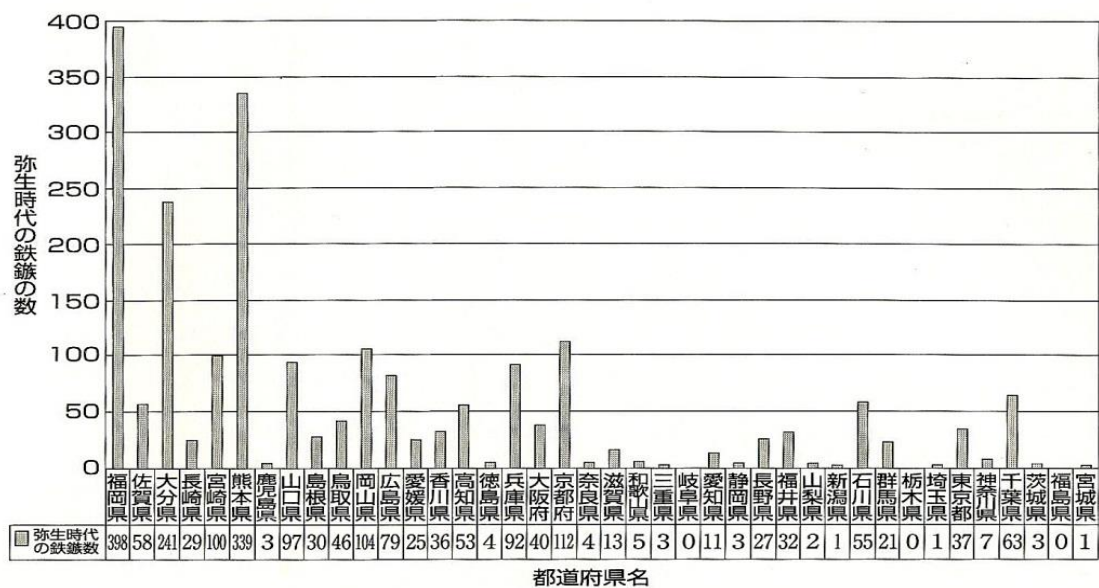


図1 県別・弥生時代の鉄鍬の数

#### 4、遺跡の概要





## 土の中から現れた いにしへの暮らし

国内でも最大級の規模となる幅7.8mの大溝をはじめ、多数の住居跡のほか、土器や鉄器を製作していた可能性がある跡などが見つかっています。当時、大変多くの人々が生活し、進んだ技術を持っていたことが分かります。

今後の発掘調査で、方保田東原遺跡の特長が、さらに明らかになっていくことでしょう。

## 掘り出された 古代の貴重な品々

全国唯一となる石包丁形鉄器をはじめ、特殊な祭器とされる巴形銅器や鏡、当時の中国の皇帝も珍重していた朱を精製する道具など、全国でもあまり見られない貴重な品々が見つかっています。

これらのうち、28種139点が熊本県重要文化財に指定されています。  
(平成20年6月23日指定 考古第13号)

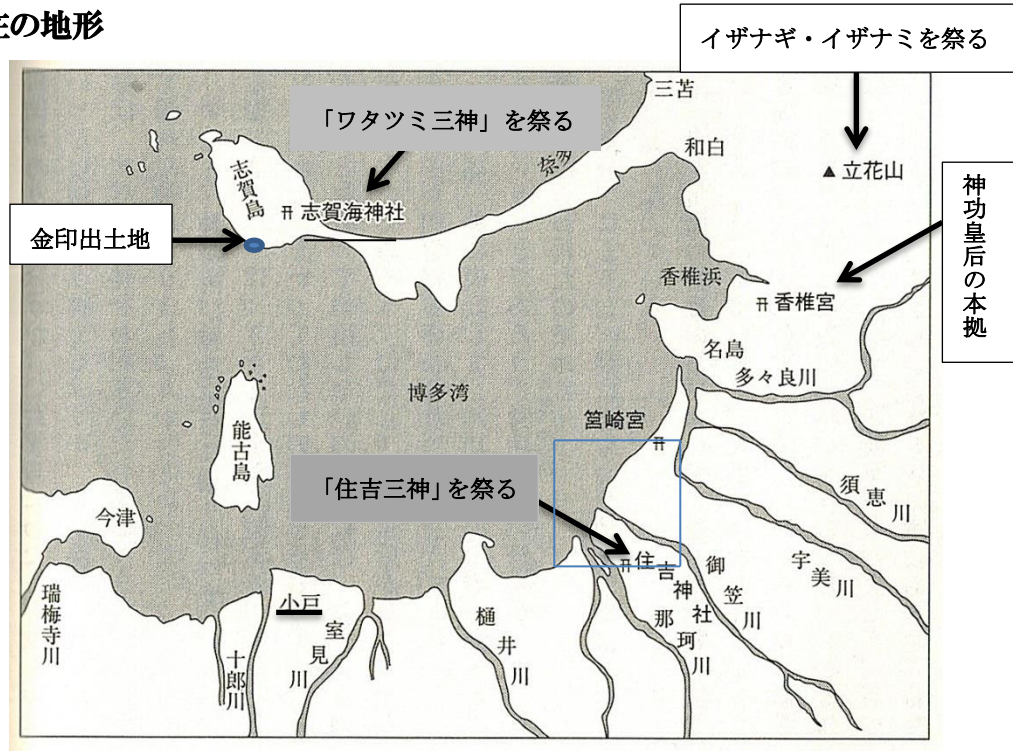




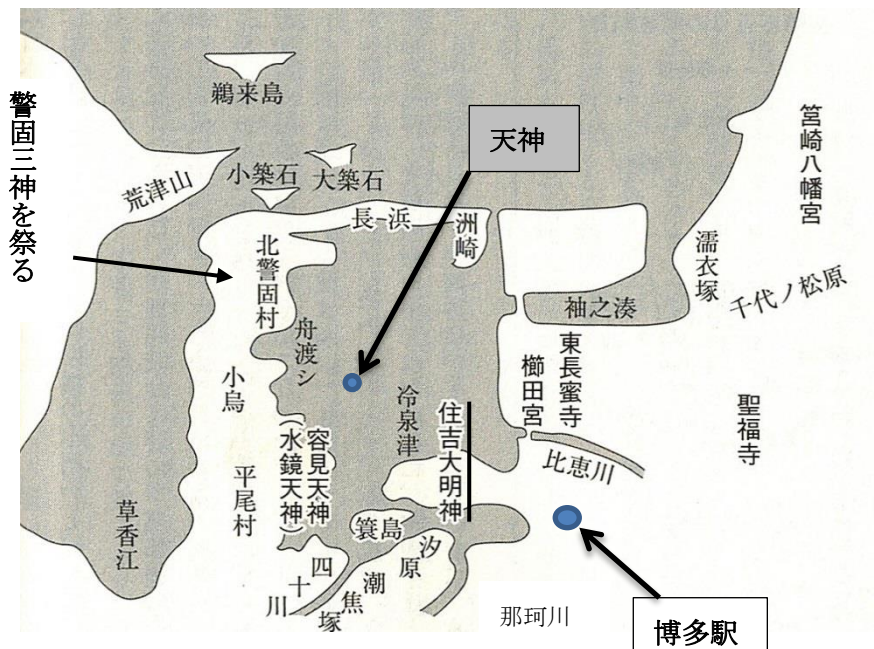
## 【テーマⅣ】日本の古代神話と邪馬台国

### 1、奴国と記紀の神々

#### (1)現在の地形



#### (2)住吉神社に残された「博多古図」



## 2、『新唐書』日本伝の冒頭の記事

(1)中国唐代の正史。北宋の欧陽脩らが編纂。嘉祐6年(1060年)成立

(2)『魏志倭人伝』など中国側の過去の情報と遣隋使・遣唐使の情報を統合

・遣隋使・・600年(推古8年)～618年(推古26年)の18年間に6回派遣

・遣唐使・・630年(舒明2年)～894年(寛平6)までの264年間に13回派遣

日本は、古の倭の奴也。京師を去ること「一」万四千里にして、新羅の東南に直りて海中に在り。島にして居す。〔その土地の広さは〕東西には五カ月の行にして、南北には三カ月の行なり。

国〔の都〕には城郭無く、木を聯ねて柵落と為し、草を以て屋を茨く。左右には小島五十余り〔ありて〕、皆自ら国と名づけ、而して之に臣附す。本率一人を置き、諸部を檢察せしむ。

其の俗は女多く、男少なし、文字有り、浮屠の法を尚ぶ。其の官には十有二等あり。

其の王の姓は阿毎氏、自ら言う、初主は天御中主と号し、彦瀲に至るまで凡そ三十二世、皆「尊」を以て号と為し、筑紫城に居す。彦瀲の子、神武立ち、更めて天皇を以て号と為し、治を大和州に徙す。

## (3)『新唐書』日本伝から読み取れること

①日本のルーツは、「古の倭の奴」という認識・・奴国は博多湾岸にあり

②初代の王は「天御中主(あめのみなかぬし)」という認識

③九州の「筑紫城」を拠点としていたという認識

④神武天皇が九州から「大和州に徙(うつ)した」という認識



### 3、『古事記』の冒頭の記事

#### (1)712年に成立

〔天地のはじめ〕

天地の初発の時、高天の原に成りませる神の名は、天の御中主の神。次に高御産巢日の神。次に神産巢日の神。この三柱の神は、みな独神に成りまして、身を隠したまひき。

次に国稚く、浮かべる脂の如くして水母なす漂へる時に、葦牙のごと萌え騰る物に因りて成りませる神の名は、宇摩志阿斯訶備比古遅の神。次に天の常立の神。この二柱の神もみな独神に成りまして、身を隠したまひき。

上の件、五柱の神は別天つ神。

次に成りませる神の名は、国の常立の神。次に豊雲野の神。この二柱の神も、独神に成りまして、身を隠したまひき。次に成りませる神の名は、宇比地邇の神。次に妹湊比智邇の神。次に角杣の神。次に妹活杣の神。二柱。次に意富斗能地の神。次に妹大斗乃弁の神。次に於母陀流の神。次に妹阿夜訶志古泥の神。次に伊耶那岐の神。次に妹伊耶那美神。

上の件、国の常立の神より下、伊耶那美神より前を、并はせて神世七代と称す。上の二柱は、独神はおのおの一代とまをす。次に及びます十神はおのおの二神を合はせて一代とまをす。

#### (2)『古事記』から読み取れること

##### ①高天原の初代の神は、「天御中主命」という認識

- ・伊耶那岐神(イザナギノミコト)は天御中主命の末裔である。

##### ②神々の故郷は「高天原」という認識

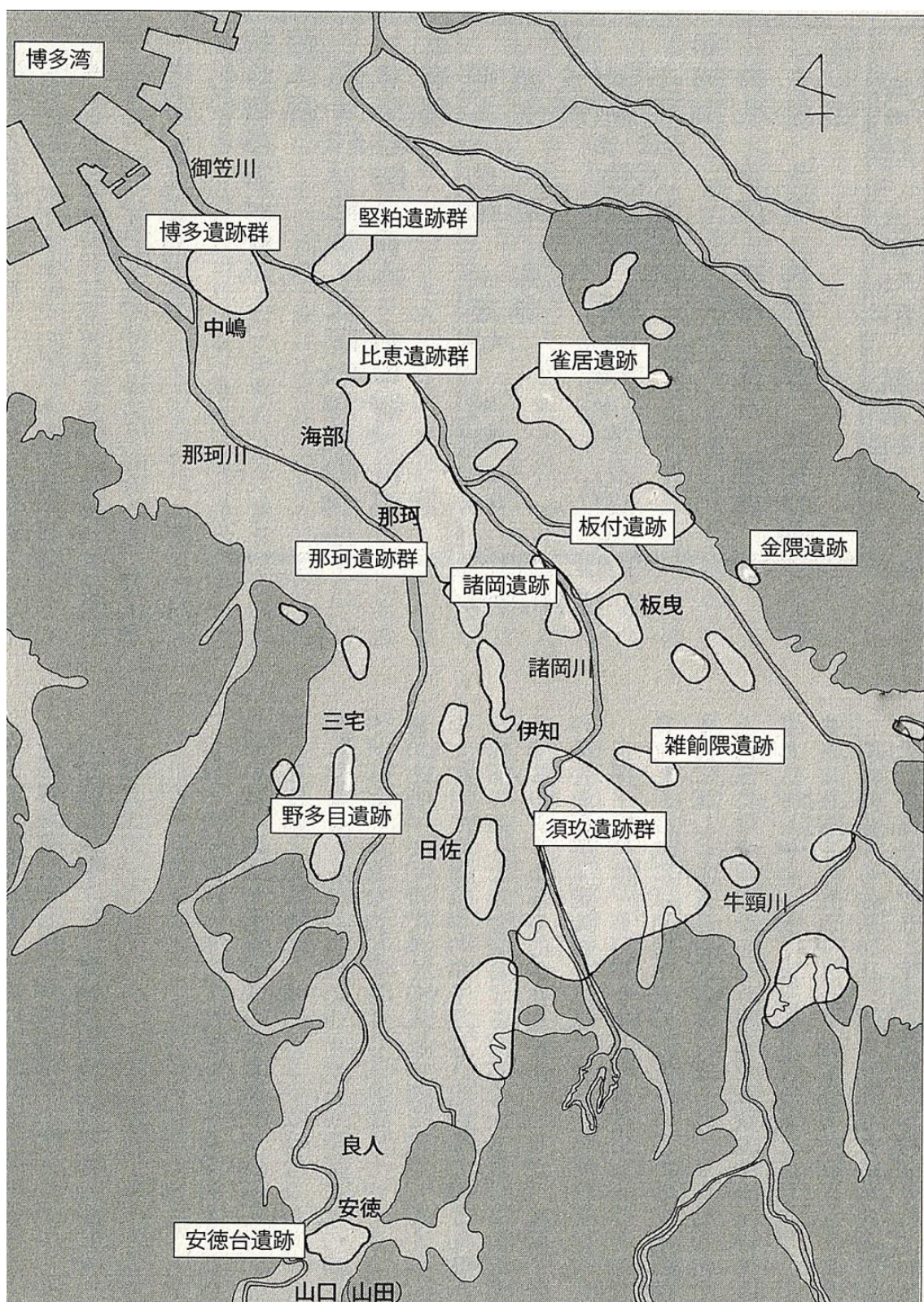
- ・イザナギや天照大神がいた場所
- ・イザナギが天照大神に高天原を治めよと命じた。

##### ③奴国の記憶

奴(nag)の王→那珂の王→中の王→天御中主神?

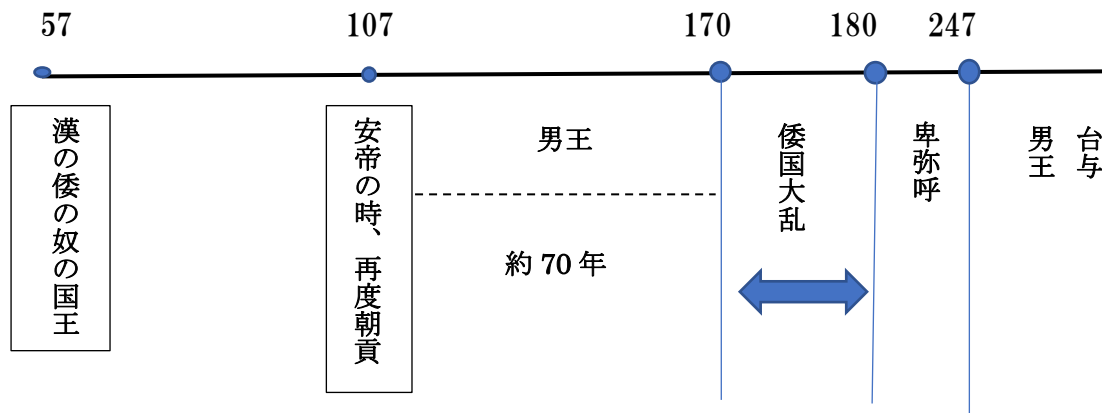


#### 4、奴国の遺跡群

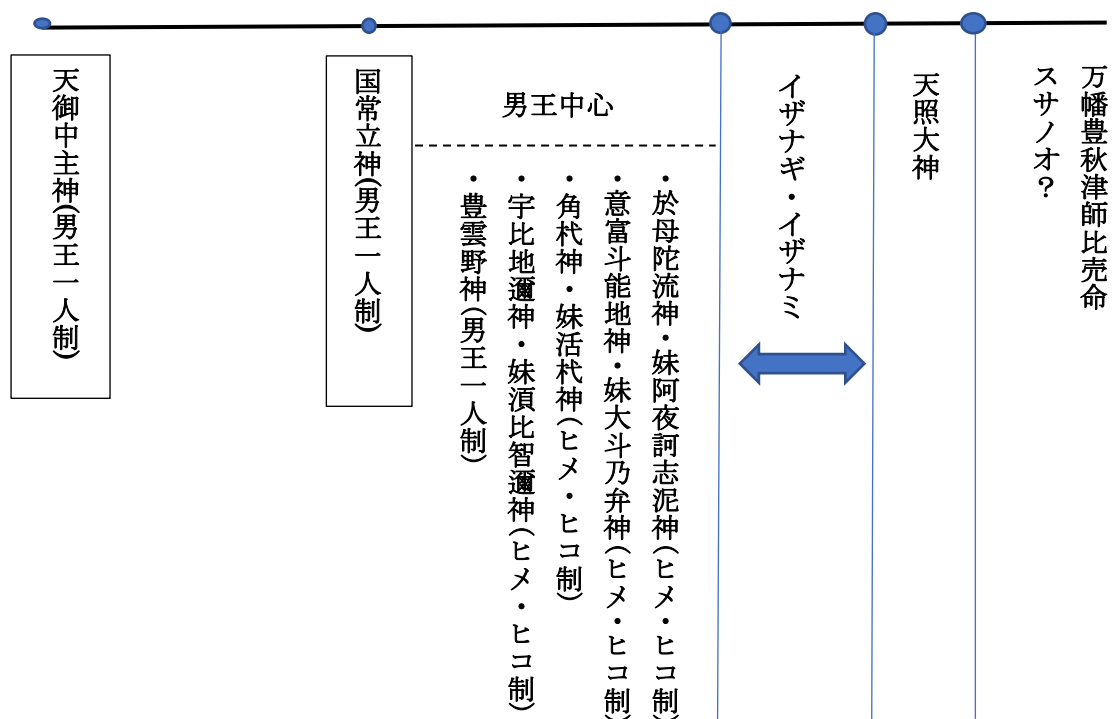


## 5、中国文献と日本文献のパラレルな関係

### (1)『後漢書』・『魏志倭人伝』



### (2)『古事記』



23 年 王莽、敗死

25 年 光武帝が後漢を建国する。

56 年 光武帝が東方に巡幸。泰山で封禪の儀をおこなう。

57 年 1 月倭の奴国が後漢に朝貢し、光武帝から金印を授与される(『後漢書』)

2 月光武帝が死去。明帝が即位

「漢の倭の奴の国王」・博多湾岸・那珂川流域を支配する王

奴(nag)の王=那珂の王=中の王→天御中主神



107 年「倭国王師升等、生口百六十人を献じ、願いて見えんことを請う」(『後漢書』東夷伝)

※唐時代の『通典』には「倭面土地王師升等」とあり、内藤湖南は「倭面土国」が本来の姿であるとした。しかし『隋書』には「安帝の時、また使いを遣わして朝貢し、これを倭の奴国という」とある。

※170～180 年(180 年前後) 倭国大乱

## 6、奴国の時代の国々



### (1)銅鏡・銅剣・玉の珍重——三種の神器の起源

墓への埋葬→邪馬台国・古墳時代へ継承

三種の神器→天皇家へ継承

### (2)小国家群の形成

100 余国の形成→邪馬台国時代は 30 国余国

### (3)王の登場

奴国の時代の王→女王卑弥呼登場の基盤→天皇制への発展



表1 北部九州における王墓・首長墓

| 時期・地域 | 末盧国  | 伊都国   | 旧早良城 | 奴国                     | 旧御笠城 | 旧御原城 | 旧夜須城 | 旧下座城 | 旧嘉穂城 | 旧三根城 | 旧神埼城 |
|-------|------|-------|------|------------------------|------|------|------|------|------|------|------|
| 前期末   |      |       |      | 板付田端                   |      |      |      |      |      |      |      |
| 中     | 初頭   |       |      | 吉武高木                   |      |      |      |      | 鎌田原  |      |      |
| 前半    | 宇木汲田 |       |      | 吉武大石                   |      |      |      |      |      |      |      |
| 中頃    |      |       |      |                        |      | 隈西小田 |      |      |      |      | 吉野ヶ里 |
| 後半    | 田島6号 | 三雲南小路 | 樋波   | 須玖岡本D<br>須玖岡本B<br>門田辻田 | 二日市峯 | 隈西小田 | 東小田峯 | 栗山   | 立岩   | 六の幡  | 二塚山  |
| 期     |      |       |      |                        |      |      |      |      |      |      |      |

## 7、「倭国大乱」

①奴国と近隣諸国との対立か。

②この動乱によって奴国から邪馬台国へ覇権が移動した可能性

『魏志倭人伝』は「その国は、もと男を王としていた。男が王となっていたのは、七、八十年間であつたが、国は乱れて、攻伐すること歴年、すなわち共に一女子を立てて王となす。名づけて卑弥呼という」と記す。すなわち、「倭国大乱」を鎮めるために卑弥呼が擁立されたとしている。

『後漢書』・・「桓・霊の間、倭国大いに乱れ、こもごもあい攻伐して歴年主なし」

『晋書』・・「漢末、倭人乱れ」

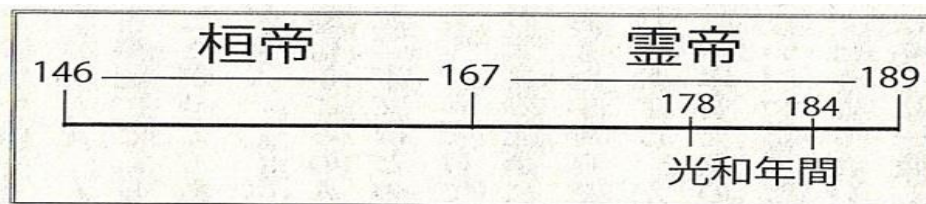
『梁書』・・「漢の光和中、倭国乱れ、あい攻伐して年を経る」

『隋書』・・「桓霊の間其の国大いに乱れ、通(たが)いに相攻伐」

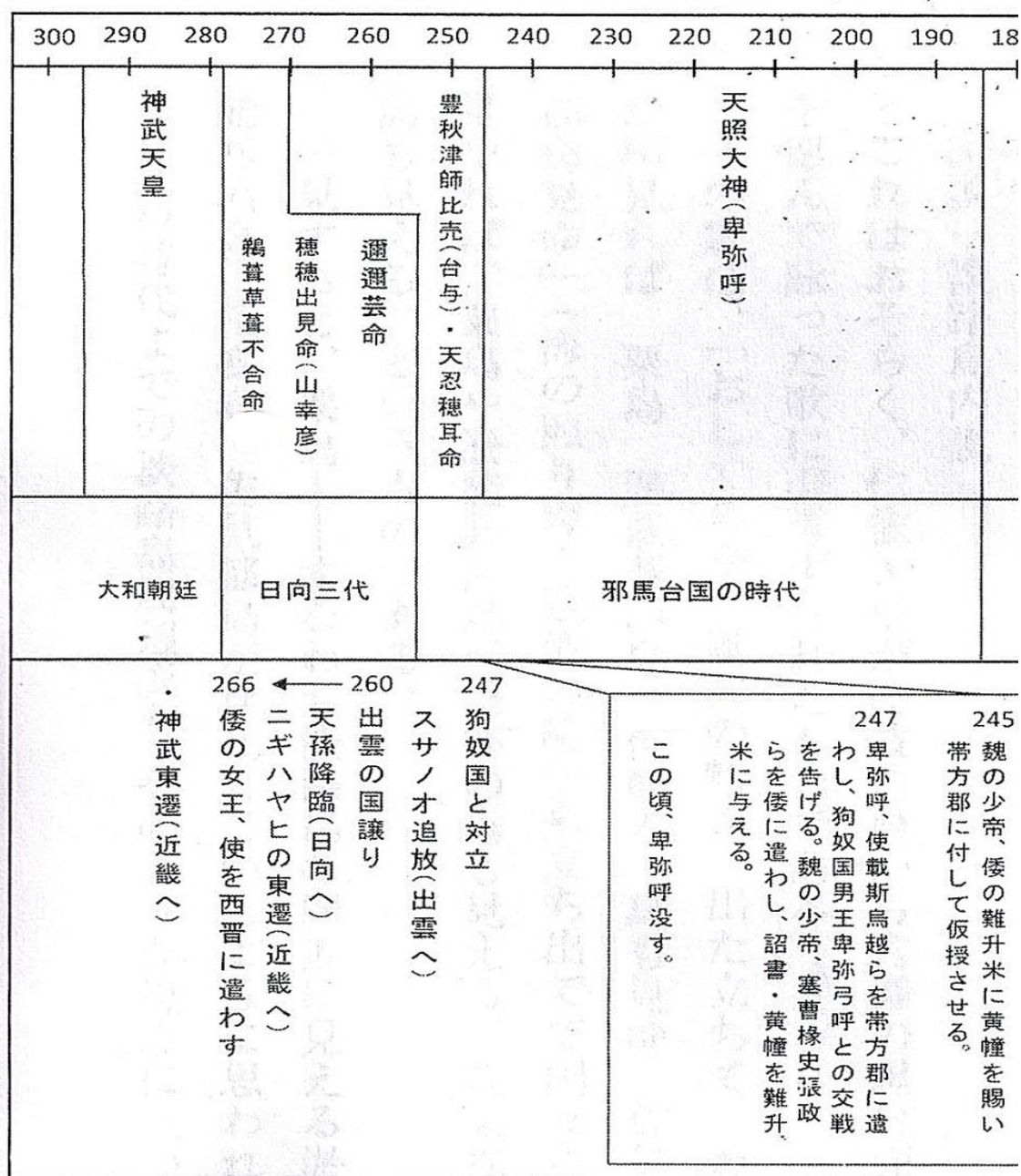
『北史』・・「霊帝光和中、其の国乱れ、通に相攻伐」

『太平御覧』・・「霊帝光和中」

これらのことからみて、「倭国大乱」は170年代に勃発し、180年ごろ収束したとみられる。そして、卑弥呼が女王に共立された。



## 8、統合年表の試み





## 河村哲夫(かわむら・てつお)

1947 年(昭和 22)年福岡県柳川市生まれ。

九州大学法学部卒、歴史作家、日本古代史ネットワーク副会長

福岡県文化団体連合会顧問、ふくおかアジア文化塾代表

立花壱岐研究会会員、元『季刊邪馬台国』編纂委員長

西日本新聞 TNC 文化サークル講師、朝日カルチャーセンター講師

大野城市山城塾講師

### 〈著作歴〉

『志は、天下～柳川藩最後の家老・立花壱岐～(全 5 巻)』(1995 年海鳥社)

「小楠と立花壱岐」(1998 年『横井小楠のすべて』新人物往来社)

『立花宗茂』(1999 年、西日本新聞社)

『柳川城炎上～立花壱岐・もうひとつの維新史～』(1999 年角川書店)

『西日本古代紀行～神功皇后風土記～』(2001 年西日本新聞社)

『筑後争乱記～蒲池一族の興亡～』(2003 年海鳥社)

『九州を制覇した大王～景行天皇巡幸記～』(2006 年海鳥社)

『天を翔けた男～西海の豪商・石本平兵衛～』(2007 年 11 月梓書院)

「北部九州における神功皇后伝承」(2008 年、『季刊邪馬台国』97 号、98 号)

「九州における景行天皇伝承」(2008 年、『季刊邪馬台国』99 号)

「『季刊邪馬台国』100 号への軌跡」(2008 年、『季刊邪馬台国』100 号)

「小楠と立花壱岐」(2009 年 11 月、『別冊環・横井小楠』藤原書店)

『龍王の海～国姓爺・鄭成功～』(2010 年 3 月海鳥社)

「小楠の後継者、立花壱岐」(2011 年 1 月、『環』藤原書店)

『天草の豪商石本平兵衛』(2012 年 8 月藤原書店)

『神功皇后の謎を解く～伝承地探訪録～』(2013 年 12 月原書房)

『景行天皇と日本武尊～列島を制覇した大王～』(2014 年 6 月原書房)

『法頭の旅・ブッダへの道』(『季刊邪馬台国』に連載)

### (テレビ・ラジオ出演)

平成 31 年 1 月 NHK「日本人のおなまえっ！ 金栗の由来・ルーツ」

平成 28 年より RKB ラジオ「古代の福岡を歩く」レギュラー出演